項羽　項羽（こうう）

【原文・書き下し文】

1 力拔山兮人所レ知
2 鴻門之會計何癡
3 英雄膽見沈レ船日
4 王覇圖空弑レ帝時
5 七十戰場誰得レ敵
6 八千子弟悉無レ遺
7 重瞳亦眩斗巵酒
8 失卻龍顏隆準兒

力（ちから）　山（やま）を抜（ぬ）くは人（ひと）の知（し）る所（ところ）なるも
鴻門（こうもん）の会（かい）　計（けい）　何（なん）ぞ癡（おろ）かなる
英雄（えいゆう）　胆（たん）を見（あらわ）す　船（ふね）を沈（しず）むる日（ひ）
王覇（おうは）　図（と）は空（むな）し　帝（てい）を弑（しい）する時（とき）
七十（ななじゅう）の戦場（せんじょう）　誰（だれ）か敵（てき）するを得（え）ん
八千（はっせん）の子弟（してい）　悉（ことごと）く遺（のこ）る無（な）し
重瞳（ちょうどう）も亦（また）斗巵酒（としゅ）に眩（くら）み
失却（しっきゃく）す　龍顔隆準（りゅうがんりゅうじゅん）の児（じ）

【平仄・詩型・押韻】　○平声　●仄声　◎平声の押韻

1 ●●○○○●◎
2 ○○○○●○◎
3 ○○●●○○●
4 ○●○○●●◎
5 ●●●○○●●
6 ●○●●●○◎
7 ○○●●●○●
8 ●●○○○●◎

七言律詩

『広韻』上平五支（知・癡・兒）六脂（遺）七之（時）同用。『平水韻』上平四支。

【校勘】

下の【補説】を参照。

【現代語訳】

項羽（こうう）

その力が山を打ち抜くほどだったのは誰もが知るところであったが、鴻門（こうもん）の会（かい）の計略はなんと思慮の足りないことか。

船を沈めた日は英雄の心意気を示したが、皇帝を殺した時に天下制覇の野望は幻となったのである。

七十回もの戦いでは誰一人として敵う者などなかったが、八千もの若者たちは誰もみな生き残ることはなかった。

目に二つの眸を持つといっても一斗の酒のせいで先が見えなくなり、皇帝の骨相をした者を取り逃がしてしまう羽目になったではないか。

【解題】

この詩は天保四年(癸巳 一八三三)、月性十七歳ころ、蔵春園での作。内容は秦王朝の衰退に乗じて天下に覇を唱えようとして劉邦(紀元前二四七?二五六?-紀元前一九五)と争った項羽(紀元前二三二-紀元前二〇二)を詠んだもの。結果、劉邦が勝って前漢王朝の初代皇帝、高祖となるが、月性はその敗者である項羽を批判的に詠む。このように歴史を題材にしたものを詠史詩といい、現存する月性詩の中で最初のころの詠史詩に入る。

【語釈】

0項羽　項が姓、名を籍といい、羽は字〔中国では名で呼ぶことはタブーであった〕で、下相〔江蘇省宿遷市の西南〕の人で、代々、楚の将軍の家柄だった。**1・2**この首聯〔第一聯。第一句・第二句〕の出句〔二句一聯の前の句〕で項羽を褒め、対句〔二句一聯の後の句〕では項羽を非難する。**1力拔山兮**　漢、司馬遷の『史記』巻七「項羽本」に、劉邦の軍に垓下〔安徽省宿州市霊璧県南部と蚌埠市固鎮県北部〕で包囲されて万策尽きた項羽が、その愛姫、虞美人を前に「力山を抜き気は世を蓋う。時利あらずして騅〔項羽の愛馬の名〕は逝かず。騅の逝かざるを奈何すべき。虞や虞や若を奈何せん(力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何)」と歌ったのに拠る。項羽が並外れた強者であったことは、同じく『史記』「項羽本紀」に、「籍〔項羽の名〕長さ八尺余り〔一尺は22.5㎝で180㎝以上〕にして、力は能く鼎〔食物を煮る金属製の重い容器でふつうは三本足〕を扛ぎ、才気は人に過ぎ、呉中の子弟〔若者〕と雖も皆已に籍を憚れり〔恐れていた〕(籍長八尺、餘力能扛鼎、才氣過人、雖吳中子弟皆已憚籍矣)」とある。唐、于季子「項羽を詠む(詠項羽)」詩に、「北に伐ちて趙を全うす〔統一する〕と雖も、東に帰りて秦に王たらず〔秦の都のあった地を含む関中の王となれなかった〕。空しく歌う 山を抜く力、江を渡るの人と作るを羞づ(北伐雖全趙、東歸不王秦。空歌拔山力、羞作渡江人)」。**2鴻門之會**　項羽と劉邦が、秦の都のあった咸陽の西、鴻門〔陝西省西安市臨潼区〕で会したことをいう。そもそも秦を倒すために擁立された楚の懐王が、最初に秦の都、咸陽に攻め入った者をその地一帯の関中の王にすると約束し、劉邦がその一番乗りを果たした。遅れを取った項羽がそれに

怒ったため、当時、力関係では圧倒的に不利だった劉邦が項羽に詫びを入れるために鴻門に赴いたのである。項羽の軍師、范増はこれを絶好の機会と捉えて項羽に劉邦の殺害をしきりに促すが、優柔不断な項羽はついに劉邦を取り逃がしてしまい、その後、両者の形勢は逆転していくことになる。 **計** 劉邦を殺害するための計略。劉邦を剣舞でもてなすと称して項羽の従弟、項荘に殺害させようとしたが、劉邦の部下である張良と親しかった項羽の叔父、項伯はそれを察知し剣で舞いながら劉邦を守った。明、陳衎「戯馬台詩(戯馬臺詩)二十首」其の二十には、「項羽英雄力山を抜くも、台を築きて馬と戯れ楽しみて還るを忘る。鴻門宴を設けて徒らに計を生じ、大地溝分かちて〔項羽と劉邦が鴻溝というところを境に天下を分けようとした〕好事閑たり(項羽英雄力抜山、築臺戯馬樂忘還。鴻門設宴徒生計、大地溝分好事閑)」と項羽の無策ぶりを批判する。 **何** 詠嘆のことば。 **癡** 愚かで間が抜けている。 **3・4** この頷聯(第二聯。第三句と第四句)も項羽の英雄ぶりと迂闊な行為を対照的に詠む。 **3英雄** 項羽を指す。 **膽見** 「膽」は胆力・度胸、「見」は外に示すこと。 **沈船日** かつて項羽が全軍を率いて漳水という河を渡った時の決死の覚悟として、『史記』「項羽本紀」に、「船を沈め、釜甑を破り〔炊事用の釜と甑を壊して〕、廬舎〔家〕を焼き、三日の糧〔三日分の食料〕を持して、以て士卒〔兵士〕に必ず死に、一も還る心無きを〔必死の決意で生きて帰ろうとする心など微塵もないこと〕示さんとす(沈船、破釜甑、燒廬舍、持三日糧、以示士卒必死、無一還心)」と記す。 **4王覇** 「覇王」という称号を得た項羽を指す。『史記』「項羽本紀」には、項羽がみずから「西楚の覇王(西楚覇王)」となったことが記され、更にはその「項羽本紀」の最後に付された司馬遷の項羽に対する評価のことばの中にも、「号して覇王と為す(號爲覇王)」と記されており、ここは第三句の「英雄」と対になっていることから、平仄という作詩上の関係で「王」(平)の字と「覇」(仄)の字を入れ替えたものと見ておく。もっとも仁徳で天下を治める者を王者といい、武力で天下を治める者を覇者というが、ここは王者・覇者たちによる天下統一という大業の意としての「王覇」と見ることも可能であろう。嘉永元年(一八四八)、月性が始皇帝の事蹟を記した『史記』巻六「秦始皇本紀」を読んで作った「秦紀を読む(讀秦紀)」詩(『清狂遺稿』上 三二歳)に、「王覇 業成りて六国を并すも〔韓・趙・魏・燕・斉・楚の六国を併合したが〕、神仙 路絶えて三山を失す〔秦の始皇帝が徐福のことばを信じて東海にあるという方丈・蓬萊・瀛洲の三つ神山に不老不死の薬を求めさせたが結局その場所はわからなかった〕(王覇業成幷六國、神仙路絶失三山)」と始皇帝の全国制覇はわずか彼一代しか保ち得なかったことを詠む。 **圖空** 天下統一という大業のもくろみが泡となって消えてしまう。 **弑帝** 項羽が義帝を殺したことをいう。はじめ秦を打倒するために担ぎ出されたのが楚の王族の末裔で、当時、羊飼いをしていた熊心である。彼は項羽によって懐王、さらには義帝として祭り上げられるが、邪魔になった義帝は、漢の元年(紀元前〇六)、彭城〔江蘇省徐州市〕から遥か南方の郴〔湖南省郴州市〕への移居を迫られ、その途中で項羽の部下によって殺害された。「弑」とは臣下など身分の低い

者が主君など身分の高い者を殺すこと。 **5・6** 首聯・頷聯、そしてこの頸聯〔第三聯。第五句・第六句〕とここまで項羽への評価と批判を対照的に畳みかけるように繰り返すことで項羽への批判が強く増幅される効果がある。 **七十戰場** 項羽が戦った戦の概数。『史記』「項羽本紀」には、項羽が垓下の包囲網を突破して東城〔安徽省定遠県〕に逃れて来た時にはわずか二十八騎、そこで彼らに向かって「吾 兵を起してより今に至るまで八歳〔八年〕なり。身ら七十余戦い、当たる所の者は破り、撃つ所の者は服せしめ〔服従させ〕、未だ嘗て敗北せず、遂に覇たりて天下を有つ。然れども今卒に此に困しむは、此れ天の我を亡ぼすにして、戦いの罪に非ざるなり〔吾起兵至今八歳矣。身七十餘戰、所當者破、所擊者服、未嘗敗北、遂覇有天下。然今卒困於此、此天之亡我、非戰之罪也〕」と述べるくだりあり、このような状況に陥ったのが天命だとは認めつつも武将としての自負はまったく棄てていない。蔵春園の学友たちの詩を収めた『遠帆樓同社詩鈔初稿』巻之二に別府義實も「項羽」と題する詩を載せて、「中原に鹿を逐いて〔天下統一の野望を抱く〕兵塵〔戦いで巻き起こる砂ぼこり〕暗く、七十二回攻戦頻りなり。枯骨空しく帰る故郷の土、真に錦を衣て夜行の人と成る〔まだ項羽が勢いのある時に故郷に凱旋しないのは夜中にりっぱな服を着て歩くようなものだと言った〕（中原逐鹿暗兵塵、七十二回攻戰頻。枯骨空歸故郷土、眞成衣錦夜行人）」。 **誰得** 誰が……できようか、という反語のことば。 **敵** 敵う、相手になる。 **6八千子弟** はじめ項羽が戦いのためにかつて江東の地から引きつれていった若者たちをいう。『史記』「項羽本紀」に、烏江〔安徽省馬鞍山市〕という渡し場まで逃れて来ると、そこの長が長江の向こう岸の江東に渡って再起を図るようにと船を準備するが、項羽は笑って「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ること為さん。且つ籍〔項羽の名〕江東の子弟八千人と江を渡りて西するも、今一人の還るもの無し。縦い江東の父兄憐みて我を王とすとも、我何の面目ありてか之に見えん〔どういう顔で彼らに会おうというのか〕。縦い彼言わずとも、籍 独り心に愧じざらんや（天之亡我、我何渡爲。且籍與江東子弟八千人渡江而西、今無一人還。縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。縱彼不言、籍獨不愧於心乎）」と、ここを死に場所と覚悟を決めたのである。 **悉** 一人残らず、みな。 **遺** 生き残る。 **7・8** 劉邦と同用に人とは異なる容貌を持つ項羽が失策によって天下取りの野望をも逃してしまったことを言う。 **7重瞳** 目の中に二つの眸があることで、そのような異相を持つ項羽が人より優れた傑物であることを表す。『史記』「項羽本紀」の最後に付された司馬遷の項羽に対する評語の中に、司馬遷が人から聞いたこととして、「舜〔伝説上の聖天子〕の目は蓋し重瞳子なりと。又た聞く項羽も亦た重瞳子と。羽 豈に其の苗裔なるか〔なんと舜の末裔だったのだろうか〕（舜目蓋重瞳子。又聞項羽亦重瞳子、羽豈其苗裔邪）」。 **亦** ……もまた。 **眩** （物事をよく見ることのできる不思議な目をしている筈だったのにそれでも）その先が見えず幻惑させられる。 **斗巵酒** 一斗〔約1.94リットル〕の酒も注ぐことのできる大きな杯。鴻門の会（第二句「鴻門之會」の【語釈】参照）で主君の劉備が剣舞にかこつけて殺害されそうだと知った樊噲が門衛を突き倒して中まで入って項羽を睨み付けた。その後のくだりを『史記』「項羽本紀」は次のように記す。「項王〔項羽〕曰く壮士なり。之に巵酒を賜えと。則ち斗巵酒を与う。噲 拝謝して〔感謝の礼をして〕起ち、立ちな

がら之を飲む。項王曰く、之に彘肩〔豚の肩肉〕を賜えと。則ち一生彘肩〔ひとかたまりの豚の肩の生肉〕を与う。樊噲 其の盾を地に覆せ、彘肩を上に加え、剣を抜きて之を啗らう。項王曰く、壮士なり。能く復た飲むかと。樊噲曰く、臣〔項羽に対する謙称、わたくしめ〕死すら且つ避けざるに〔死ぬことさえ何とも思わないのに〕、巵酒安くんぞ辞するに足らん〔酒杯など遠慮しようか〕（項王曰、壮士。賜之巵酒。則與斗巵酒。噲拝謝起、立而飲之。項王曰、賜之彘肩。則與一生彘肩。樊噲覆其盾於地、加彘肩上、拔劒切而啗之。項王曰、壮士。能復飲乎。樊噲曰、臣死且不避、巵酒安足辭）」。 **8失卻** 取り逃す。 **龍顔** **隆準** 「龍顔」は眉の骨がまるく突き出て、皇帝の骨相とされる。「隆準」は鼻が高いこと。漢の初代皇帝となった劉備の事を記した『史記』巻八「高祖本紀」には、劉邦の誕生にまつわる話と容貌について次のように記している。「劉媼〔劉邦の母〕嘗て大沢の陂に息い、夢に神と遇う。是の時雷電ありて晦冥たり〔暗くなった〕。太公〔劉邦の父〕往きて視れば則ち蛟龍〔竜の一種〕を其の上〔劉邦の母の上〕に見る。已にして身有りて〔身ごもって〕遂に高祖〔劉邦〕を産む。高祖 人と為り〔容貌〕隆準にして龍顔、須髯美にして〔あごひげとほおひげが立派で〕、左の股に七十二の黒子〔ほくろ〕有り（劉媼嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥。太公往視則見蛟龍於其上。已而有身遂産高祖。高祖爲人隆準而龍顔、美須髯、左股有七十二黒子）」。

【補説】

月性の項羽に対するこの詩での評価は、『史記』「項羽本紀」の最後に付されている司馬遷の評語に「自ら功伐〔手がら〕を矜り、其の私智〔ひとりの人間の狭い了見〕を奮いて古を師とせずして、霸王の業と謂いて、力征〔武力で制圧する〕を以て天下を経営〔治めて仕切る〕せんと欲す。五年にして卒に其の国を亡ぼし、身は東城に死すも、尚お覚寤せずして〔気づかないで〕自ら責めざるは過てり。乃ち天の我を亡ぼすにして、用兵の罪に非ずと引くは、豈に謬らずや〔なんという間違いではないか〕（自矜功伐、奮其私智而不師古、謂霸王之業、欲以力征經營天下。五年卒亡其國、身死東城、尚不覺寤而不自責過矣。乃引天亡我、非用兵之罪也。豈不謬哉）」とあるのと同じである。このように劉邦との覇権争いに敗れた項羽に対する評価は、中国でも概ね厳しいものがあり、唐の杜牧（八〇三―八五二）も項羽を題材にした次のような詠史詩を作っている。

題烏江亭　　烏江亭〔戦いに敗れて項羽が辿り着いた烏江の渡し場〕に題す

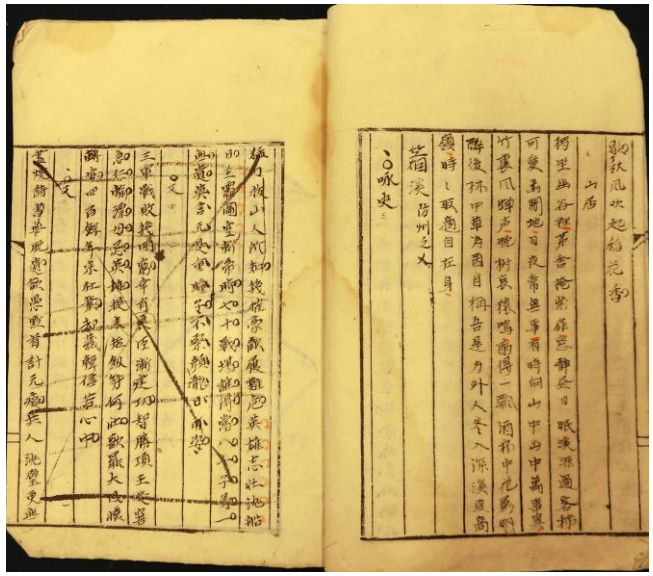
勝敗兵家事不期　　勝敗は兵家も事期せず〔予想できるものではない〕
包羞忍恥是男兒　　羞を包み恥を忍ぶは是れ男児
江東子弟多才俊　　江東の子弟 才俊多し
卷土重來未可知　　巻土重来〔土ぼこりを立てて再び巻き返したなら〕未だ知るべからず〔天下はどうなっていたかわからない〕

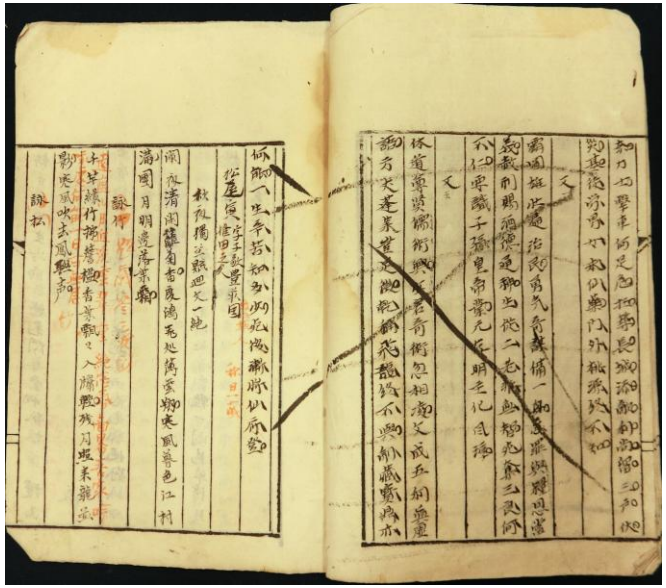
これは、もし烏江亭を渡って江東に戻って再起を期したならばという、いわゆる逆接の詠史

詩で項羽を批判するものである。

さて、この詩はかつて月性（一八一七－一八五三）が自坊の妙円寺（山口県柳井市遠崎）で主催した時習館（清狂草堂）で学んだ大洲鐵然（一八三四－一九〇二）と天地哲雄（?-?）が編纂した『清狂遺稿』（明治二五年　一八九二）上冊に載せているが、月性没後四十年近く経って出版されたこの『清狂遺稿』に載せる「項羽」詩が、直接、何に拠ったかは不明。というのは、月性在世当時、月性自ら編纂した『清狂吟稿』（山口県萩市松陰神社・東京都玉川大学教育博物館蔵・大分県中津市耶馬溪風物館所蔵）なるものがあり、概ねこれに拠ったものと思われる『清狂遺稿』と重複する詩も多いが、しかしこの「項羽」詩は『清狂吟稿』にはなく、よってこの詩が、直接、何に拠ったか不明と言わざるを得ないが、ただこの詩の草稿が月性が十五歳の時からほぼ五年間にわたって学んだ豊前の蔵春園の恒遠醒窓の子孫に当る恒遠俊輔氏が所有する資料（福岡県豊前市求菩提資料館に寄託）のひとつ『同韻集』の中に見ることができる。

『自遠館同韻詩集』





他の学友と同じくはじめに名前「竺畑溪」を明示する。「竺」は僧侶の意だが、他の学友で僧侶の場合は「釋」の字が用いられている。「畑（烟・煙）溪」は月性がこの頃に使っていた号である。その下に小さく「防州之人」と月性の出身地が記され、次の行に「咏（詠）史」と題する連作詩を五首が並び、その最初の詩が『清狂遺稿』に載せる「項羽」の草稿といえる。

猛力拔山人所知　猛力　山を抜くは人の知る所
幾摧豪敵履難危　幾たびか豪敵を摧きて難危を履む
英雄志壯沈船日　英雄　志は壮たり　船を沈むる日

王覇圖空斬帝時　　王覇 図は空し 帝を斬る時
七十戰場誰得當　　七十の戦場 誰か当たるを得ん
八千子弟一無遺　　八千の子弟 一も遺る無し
莫言元是重瞳子　　言う莫かれ 元是れ重瞳子と
不察顏龍日角姿　　察せず 顔龍・日角〔額の真ん中が隆起している〕の姿を

この詩は「詠史」の最初に置かれている詩だが、「詠史」の下に薄く墨書で「三」の字があり、次の詩は「又」と書かれ、その下に薄く「四」の字ある。内容は劉邦らの漢王朝の創建に焦点を当てたものである。

三軍戰敗幾回窮　　三軍〔軍隊〕戦い敗れて幾回か窮まるも
幸有良臣漸建功　　幸 に良臣有りて漸く功を建つ
智勝項王逃窘急　　智は項王〔項羽〕に勝りて窘急より逃れ〔鴻門の会での項伯や樊噲などの機転で窮地から脱したことをいう〕
仁輸漂母忌英雄　　仁は漂母に輸すも〔劉邦の武将、韓信がむかし食事を恵んでもらった洗濯女に恩返しをはするが〕英雄〔項羽〕を忌む
提来短劒勢何壯　　短剣を提げ来たれば〔劉邦が若い時から天下取りの野望を抱いていて三尺の剣を提げていた〕勢 何ぞ壮なる
歌罷大風懷轉空　　大風〔天下統一した劉邦が作った「大風歌」〕を歌い罷みて 懐 転た空し
四百餘年宗社業　　四百余年 宗社の業〔四百年間漢王朝を保ったという大業〕
却藏韓信苦心中　　却て蔵す 韓信〔劉邦の天下取りに貢献したが最後は謀反によって殺された〕
苦心の中に

三首目の〈又〉の下に薄く〈二〉の字があって秦の始皇帝の暴政を詠む。

盡燒詩書無脱遺　　尽く詩書を焼きて〔秦の始皇帝による焚書坑儒〕脱遺無く
欲愚黔首計元癡　　黔首〔天下の民〕を愚にせんと欲するは 計〔愚民政策〕 元 癡かなり
〓人沈璧更無奈　　〓（異？）人 璧を沈むるも〔湯王や武王といった聖王のように始皇帝も璧を沈めて河を祭った〕更に奈ともする無し
力士擊車何足危　　力士 車を撃つも何ぞ危うくするに足らんや〔張良が鉄槌で始皇帝の車を打ち壊そうとして失敗した〕

枉築長城添敵利
尚留三戸伏災基
徒労男女求仙薬
門外桃源終不知

枉りに長城〔万里の長城〕を築きて敵の利に添え
尚お三戸〔楚の国に三戸しか残らなかったとしても必ず秦を打ち倒すという楚の南公の決意〕を留めて災基〔秦滅亡の災いの元〕伏す
徒らに労す 男女 仙薬を求めしを〔始皇帝が不老不死の薬を求めさせたこと〕
門外 桃源 終に知らず〔秦の遺民たちが暮らすという桃花源〕

四首目の〈又〉の下に薄く〈一〉の字あって、ここは春秋の五覇の一人、秦の穆公(紀元前六八二―六二一)が始皇帝(紀元前二五九―二一〇)の天下統一の礎が築かれていたことを詠む。

覇圖雄壮遍治民
勇気奇謀備一身
忘罪與糧恩當義
赦刑賜酒徳通神

覇図雄壮〔天下に覇を唱えるという勇壮な志〕遍く民を治め
勇気奇謀 一身に備わる
罪を忘れ糧を与うれば〔穆公が仇敵の晋が飢饉に見舞われた時に食料を送った〕恩は義に当たり
刑を赦し酒を賜うれば 徳 神に通ず〔穆公は土地の者たちに自分の馬が食べられたにも関わらず許して酒まで振る舞ったので、後に窮地に追いやられた時に彼らに救われた〕

生従二老非無智
死奪三良何不仁

生きては二老に従うは〔穆公が尊んだ百里奚と蹇叔〕智無きに非ず
死しては三良を奪うは〔穆公は三人の賢臣を殉死させた〕何ぞ不仁なる

要識子孫皇帝業
元存明主化風淳

要ず識るべし子孫皇帝の業〔子孫の嬴政が天下統一の大業を成して初代の皇帝、始皇帝となった〕
元存す明主〔穆公〕の化風〔万人を善い方へと教化する〕の淳きを

五首目の〈又〉の下に薄く〈五〉の字があって、詩は、秦の後を継いだ漢王朝の第七代皇帝、武帝をも批判的に詠む。

休道尊賢儒術興
？君奇術忽相凌
文成五利眞虚語

道うを休めよ 賢を尊びて儒術興ると〔漢は儒教を国の教えとした〕
君を〓〔字が不明〕す奇術〔西域から伝わった大道芸〕忽ち相い凌ぐ
文成〔方士の李少翁が妖しげな方術で漢の武帝の歓心を買って文成将軍となった〕・五利〔欒大も方術で漢の武帝から五利将軍を与えられた〕真に虚語〔でた

らめ〕にして

方丈蓬萊豈足徴　方丈・蓬萊〔いずれも東海の中にある神仙の住むという島〕豈に徴するに足らん

乾稱飛龍終不與　乾に飛龍を称うも『周易(易経)』の「乾」の九五の爻辞に「飛龍 天に在り、大人を見るに利し(飛龍在天、利見大人)」とあり、主君が良臣を得ることを意味する〕終に与らず

制藏寶鼎亦何能　宝鼎〔漢王朝が政権を担うべき象徴としての鼎〕を制蔵するも亦た何ぞ能くせん

一生辛苦知多少　一生辛苦して知ること多少ぞ〔どれだけのことがわかるというのか〕

死後漸將仙府登　死後 漸く将に仙府〔仙界〕に登らんとす

この連作詩五首の各詩の下に附された漢数字は、一、春秋時代の秦の穆公(第四首)・二、天下統一した秦の始皇帝(第三首)・三、秦の末期の項羽と劉邦の覇権争い(第三首)、四、漢王朝の創建(第二首)・五、始皇帝と同じ轍を踏んだ漢の武帝(第五首)と時代順によるものである。このように中国の歴史に学び、それを題材にした詠史詩を作ったことが、月性をして後に我が国の幕末の危機的な状況からいかにして脱却かという方策を編み出し、且つそれを議論の詩として詠ましめることとなった、その大きな礎になったといえよう。